

『父の目を前に』

先月5月16日の致知出版社からのメルマガ「おかみさん便り」にて、「親が生きているうちに親孝行を・・・」と「偲ぶことも親孝行となる」という二つのメッセージとともに紹介されていたとても感動的なお話です。『致知』2004年11月号「致知随想」に掲載の井坂晃氏（ケミコート名誉会長）のお話だそうです。

この夏の7月29日、弔問のため九十九里に赴いた。弔問客は40人くらいであったが、私にとってこの葬式は、抑えがたい悲しみと感動が相俟って心に強く焼き付いた。故人は、当社社長・中川の義弟・菊崎氏である。

中川の説明によると、故人は49歳。妻（中川の妹）、高校3年の息子、そして中学2年の娘を残して逝ってしまったのである。故人は25日曜日の昼過ぎに、不運にも誰もいない自宅で倒れてしまったという。

奥さんはその日たまたま仕事に出ていた。成東高校の3年生で、サッカー部のキャプテンを務める長男は、練習のためやはり出ていた。片貝中学2年の長女も、所属するバスケ部ボール部の活動で出かけていて、家族全員留守の間の出来事であった。

私が中川からその知らせを受けたのは、翌26日の朝であった。午後には、通夜は27日の夜、葬儀は28日と決まったようだ。

ところが、夕刻過ぎに再び中川から電話が入った。「実は、誰もいない所で死んだ場合は、司法解剖をしなければならぬそうです。ですから、まだ葬式の日程を決められませんが、決まり次第また連絡いたします」とのことだった。

司法解剖の結果、死因は心不全と分かった。日程を改め、通夜は28日午後7時、葬儀は29日午前11時から行われることになった。その間、中川から菊崎氏の横顔を少し聞かされていた。北海道出身で、高校時代は野球部に所属し、優秀な選手であったこと。高校卒業後は野球ではなく、料理の修業のためにドイツへ3年間留学したこと。お酒が好きだったこと……。それにしても、

49歳という若さで亡くなった。本人の無念を思うと、心が痛む。

29日は、小笠原諸島付近に大型の台風があつて、珍しく西にゆっくり進んでいるとのことだった。その影響で、朝のうち房総半島は時折にわか雨に見舞われる悪天候だったが、10時前には雨も上がり、びっくりするほど澄み切った青空が広がった。11時少し前に、葬式の会場である九十九里町片目の公民館に入った。会場の大部屋は畳敷きで、棺の置かれた祭壇の前には、すでに遺族と親戚の方々が座していた。私は中川夫婦に黙礼をして後方に並んでいる折りたたみ椅子に腰掛けた。

祭壇の中央では、故人の遺影がこちらを向いてわずかに微笑んでいる。ドキリとするほど二枚目で、その表情からは男らしさが滲み出ている。会場には私のほかに高校生が5、6人、中学生の制服を着た女の子が数人、そして私のような弔問客が30人くらい座していた。

葬式は11時ちょうどに始まった。しばらくして全員の焼香が終わると、進行係の人がマイクでボソリと「弔辞」とつぶやいた。名前は呼ばれなかったが、前列の中央に座っていた高校生らしい男の子が立った。すぐに故人の長男であることが分かった。私には、彼の後ろ姿しか見えないが、手櫛でかき上げたような黒い髪はばさついている。高校の制服らしき白い半袖シャツと黒い学生ズボンに身を包み、白いベルトを締めていた。

彼はマイクを手にすると故人の遺影に一歩近づいた。

「きのう……」。

言いかけて声を詰まらせ、気を取り直してボソリと語り始めた。

「きのうサッカーの試合があつた。見ていてくれたかなあ」。

少し間をおいて、「もちろん勝つたよ」。

28日が葬式であつたら、彼は試合には出られなかった。司法解剖で日程が一日ずれたので出場できたのである。

悲しみに耐えて、父に対するせめてもの供養だの思いが、「もちろん勝つたよ」の言葉の中に込められていたように思えた。

「もう庭を掃除している姿も見られないんだね、犬と散歩している姿も見られないんだね」

「そのまま父に語りかけている。もうおいしい料理を作ってくれることも、俺のベッドで眠り込んでいることも、もうないんだね……」

「あたかもそこにいる人に話すように、今度は8月27日に試合があるから、上から見ていてね」

その場にいた弔問客は胸を詰まらせ、ハンカチで涙を拭っていた。

「小さい時キャッチボールをしたね。ノックで5本捕れたら五百円とか、10本捕れたら千円とか言っていたね。20歳になったら一緒に酒を飲もう」

「さようなら」

息子の弔辞は終わった。父との再会を胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。

「泣声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

「胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。」

「大好きだった」

「涙声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

「息子の弔辞は終わった。父との再会を胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。」

「大好きだった」

「涙声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

「息子の弔辞は終わった。父との再会を胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。」

「大好きだった」

「涙声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

「息子の弔辞は終わった。父との再会を胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。」

「大好きだった」

「涙声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

「息子の弔辞は終わった。父との再会を胸に、息子は逞しく生き抜くだろう。」

「大好きだった」

「涙声になりながらも、ひと言、ひと言、ハッキリと父に語りかけていた。本当におつかれさま、ありがとう。俺がそつちに行くまで待っていてね。さようなら」

とにかく、飼い主さんに危険が及ばないよう、完璧な状況下で、任務がこなせるように、メンテナンヌされています。もちろん優秀な盲導犬。爪切りでも自分から足を差し出すほどで、全ての診察は、非常にスムーズに進みます。

ところがある日、彼の本当の姿を見ることになるのです。それは、正確に体重を測ってみましょうか・・・と盲導犬の補助器具を、全て外した時の事でした。

豹変した彼。

彼は一目散に、病院を駆け巡りました。そして、病院内の看護士、獣医一人ひとりに挨拶をするように、じやれて、グルグル回って、伏せをしたと思いきや飛び掛かってくる。また次の人間のところへ……

そう、これが彼の本当の姿だったので。本当は、人間と一緒に、思い切り遊びたくて、走り回りたくて、普通の犬としての暮らしに憧れを持っていた。

長い間、ずっと抑えていた感情だったのでしよう。そんな彼の本当の姿を露にした原因、それは……間違いなく、彼に付けられていた補助器具でしょう。

それを付けている間、彼は「プロ」なのです。何があつても、飼い主さんを守り、自分の使命を果たさなければなりません。

飼い主さんの「いつもごめんなあ……ごめんあ……先生、少しかこの子を自由にさせてあげても良いですか？」と言う言葉が、重く心に残っています。

飼い主さんは、きつとこの子の気持ちに、ずっと気づいていたのでしよう。信頼で結ばれた強い関係。本当は遊びたいし走りた……。けれども誇りを持って、毎日仕事を続ける盲導犬に、強く感銘を受ける事となりました。

今でも、毎朝彼の姿を、交通量の多い交差点で見かけます。しつこいですが、「素質」などと安易な言葉で、彼を評価していた私自身に、今でも苛立ちを隠せません。そんな簡単なものではないのです。

彼は毎月、病院に来た時だけ、補助器具を外し、ほんの数分だけ、みんなに挨拶しに行く、自由を与えられています。私たちも精一杯、彼と挨拶をします。

犬は本当に凄いです。獣医になって良かったと思います。

（出典：+ 獣医のペット病院ウラ話）

「迷わない心」をつくる『論語』100選より

「目に見えないものを信じる」

いくら自分の生命活動の一切が、宇宙の生成力（天徳）によるものだということ、頭の中ではわかっているけれども、その本当の価値をしみじみ知ることは、難しい。天徳の活動力は、全宇宙に広がっている偉大な生命力であるから、なかなか、その一端さえ感知することができない。

ただ、唯一、ありがたいことは、そんな偉大な力が、わたし個人の中にもあるということなのだ。天徳とは、まさに遠くにある近くにある。

最近になって、人が宇宙の生成力によって生きていることが遺伝子の科学的研究によつて、はっきりわかつたのである。いままでは常識や現代科学で理解できないことは、一切ないと思つてきた。が、現代科学でも、目に見えない宇宙の偉大なる生成力に頭を下げざるを得なくなった。

いまこそ天に向かつて、「ありがとう」「おかげさまで」とお礼を申しあげるべきときがきた。

「我れを約するに礼を以てす」……孔子は、宇宙に対して礼を尽くせば、自分と宇宙の慈悲深い生成力と必ず結ばれる、と説く。

村上和雄先生が『スイッチ・オンの生き方』（致知出版社）で、こう述べられている。「人間の身体は水素、酸素、窒素など、いろいろな元素によつてできあがっています。それらの元素はすべて地球上にあるものです。ということは、私たちの身体は、地球の元素を借りて成り立っているといえると思います。（中略）地球にある元素はどこから来たのかというと、宇宙から来ています。だから私たちの身体は、もとは宇宙から来ているのです」

あなたの生命は、いま、宇宙の進化のトップに生きている。（境野勝悟著）

我れを約するに礼を以てす

「目に見えないものを信じる」

いくら自分の生命活動の一切が、宇宙の生成力（天徳）によるものだということ、頭の中ではわかっているけれども、その本当の価値をしみじみ知ることは、難しい。天徳の活動力は、全宇宙に広がっている偉大な生命力であるから、なかなか、その一端さえ感知することができない。

ただ、唯一、ありがたいことは、そんな偉大な力が、わたし個人の中にもあるということなのだ。天徳とは、まさに遠くにある近くにある。

最近になって、人が宇宙の生成力によって生きていることが遺伝子の科学的研究によつて、はっきりわかつたのである。いままでは常識や現代科学で理解できないことは、一切ないと思つてきた。が、現代科学でも、目に見えない宇宙の偉大なる生成力に頭を下げざるを得なくなった。

いまこそ天に向かつて、「ありがとう」「おかげさまで」とお礼を申しあげるべきときがきた。

「我れを約するに礼を以てす」……孔子は、宇宙に対して礼を尽くせば、自分と宇宙の慈悲深い生成力と必ず結ばれる、と説く。

村上和雄先生が『スイッチ・オンの生き方』（致知出版社）で、こう述べられている。「人間の身体は水素、酸素、窒素など、いろいろな元素によつてできあがっています。それらの元素はすべて地球上にあるものです。ということは、私たちの身体は、地球の元素を借りて成り立っているといえると思います。（中略）地球にある元素はどこから来たのかというと、宇宙から来ています。だから私たちの身体は、もとは宇宙から来ているのです」

あなたの生命は、いま、宇宙の進化のトップに生きている。（境野勝悟著）